九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

炭鉱と美術 ： 旧産炭地固有の美術活動の成立と展開に関する研究

國盛，麻衣佳

https://doi.org/10.15017/1807043

出版情報：九州大学，2016，博士（芸術工学），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式６－２）

氏　　名	國盛　麻衣佳
論　文　名	炭鉱と美術～旧産炭地固有の美術活動の成立と展開に関する研究～
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　藤原　惠洋 副　査　九州大学　准教授　知足　美加子 副　査　九州大学人文科学研究院　教授　後小路　雅弘

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究は旧産炭地固有の美術活動を跡付けると同時に、そこから閉山後に生み出されていったアートプロジェクトの変遷と意義を通して地域固有性に論及したものである。かつて日本近代のエネルギー源として重要な役割を担った炭鉱がエネルギー転換政策によって余儀なくされた閉山を境に時期を前後とわけ、芸術創造活動が地域社会との関係の中で生み出していった因果や影響関係を分析・評価した。さらに調査分析から得られた知見を基にしながら、美術家としての作品制作活動とアートプロジェクトを創出、地域再生への道筋を模索しながら問題解決へ資する成果を導き出している。

本研究は、序章、本論５章、結論から構成されている。

序章では、産炭地の盛衰過程を歴史的に俯瞰しながら本研究が対象とする実証領域を設定したうえで既往研究を批判的に分析し、さらに本論へ至る目的、方法、を述べた。すなわち戦後の産炭地と炭鉱を対象とし、そこで固有に生じた美術活動に着目、さらに閉山後に生まれたアートプロジェクトにも言及し、旧産炭地特有の芸術文化活動の方向性と生じた特徴を論考の対象としている。

第１章では、三井鉱山の職場サークルを中心に三井三池炭鉱に形成された多層的な文化活動の土壌があったことを明らかにし、それらが後のアートプロジェクト展開へ向けた基盤を成していたことを評価した。

第２章は、2009 年に目黒区美術館で開催された「‘文化’資源としての〈炭鉱〉展」を契機とし、文化資源の観点からわが国の産炭地でかたちづくられた美術活動の展開と意義が再評価された経緯を重要な事例として検証した。その結果、同展がいまだとらえ切れなかった数多くの旧産炭地の芸術活動やアートプロジェクトを調査し考察の対象としており、炭鉱の美術活動に関わった美術家へのインタビューを含め、まとめられた資料は本論文に大きな史料的価値を付加しており、重要な成果といえよう。とくに三池炭鉱を対象にした「美術」のみならず総合的な文化芸術活動への視点と実証調査は、「炭鉱と美術」に続く多領域へ関心を射程に入れた今後の研究にとっても有意義なものである。

続く第３章では、旧産炭地の歴史的・社会的背景から生まれた独特なアートプロジェクトが、美術領域にとどまらず、「負の遺産」の意識の転換、一途な崩壊過程をたどる地域コミュニティの挽回と再生、シビック・プライドの涵養や個々の創造性の喚起等、社会全体へ大きな作用を見せたことを明らかにした。

さらに第４章では、発表者が 2007 年より活動を展開してきた旧産炭地の産業遺産と固有資源を活かしたアートプロジェクトの意義と評価に関する分析考察を進めたが、本国内はもとより、英国まで足を延ばし、内外の旧産炭地を訪ね歩いて獲得した豊富な調査成果に基づき、さらにアーティス

トとして自ら取り組んだ参与観察も交え、きわめて説得力のある論及を生み出している。

続く第５章では九州青年公募展への参与調査を通して美術作品を制作し、その第三者評価を分析考察した結果、地域固有の美術表現を創出したことに対する評価がなされた反面、鑑賞者との循環性をどのように担保するか、といった課題を明らかにした。

以上より、結論では、旧産炭地に展開された固有の美術活動の意義と特徴を跡づける中、旧産炭地固有の美術活動の成立と展開を跡づける中、特に炭鉱世界において美術という表現行為が普遍的に重要であったことを明らかにしており、独創的な知見を獲得したといえよう。さらに地域固有の文脈に立脚したアートプロジェクトの意義や新たな表現創造の可能性が評価されると同時に、これらの成果が地域社会の中で資源化されることで芸術文化を基軸とした持続可能な創造的環境が形成されうると考察した。

以上より，学位審査を厳正に実施した結果，本論文は博士（芸術工学）の学位授与に値するものと認める。